

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820051

研究課題名(和文) 菅茶山『黄葉夕陽村舎詩草稿』前編の総合的研究

研究課題名(英文) The study of the first volume of "Koyosekiyosonshashi" written by Kan Chazan

研究代表者

小財 陽平 (kozai, youhei)

明治大学・法学部・講師

研究者番号：00633314

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：菅茶山は江戸後期を代表する漢詩人である。本研究では、茶山の詩集の草稿を整理し、茶山の詩風や、その交流の様相を明らかにした。

草稿には多くの書き入れが備わる。そうした書き入れを分析したところ、茶山は頼山陽と六如の書き入れにもとづいて推敲を行っており、両者の書き入れが版本成立に重要な役割を果たしていることが判明した。草稿には版本では削除された作品が数多く収録されている。これらの作品を読解することで、茶山が各地の文人たちと頻りに詩作の応酬を行っていたことが新たに判明した。

研究成果の概要(英文)：Kan Chazan was a Chinese classical poet in the late Edo period. In this study, I organized the drafts of his poetry, and clarified his poetry style and his relationship with the literati in those days. In the drafts, there are many notes in the margins, and by analyzing them, it is clear that Chazan polished and elaborated his poetry based on notes written by Rai Sanyo and Rikunjo, who both played an important role on the process of publishing the book that Chazan wrote.

The drafts include a lot of poems which were removed when the book was printed. I investigated them and found that Chazan had a great range of interchange of poetry among the literati of every place of the country.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学 和漢比較文学 江戸漢詩文

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 昨今、近世漢詩文研究の重要性は指摘する声は高まってきている。俳諧や読本などの江戸文学を研究する上で、漢詩文の知識が欠かせないことはいうまでもないが、鷗外、漱石、荷風といった近代文学を研究するにも、江戸漢詩文の知識は必要である。さらには近年めざましい進展を遂げている、明治漢詩壇へ接続するものとして、江戸漢詩文が取りざたされることも多い。しかし、それにもかかわらず、その重要性に比して、現在、江戸漢詩文を専門とする研究者の数は多くないのが実情である。

とりわけ、江戸時代後期に活躍した菅茶山などは、本場中国にも劣らぬ漢籍の素養と作詩能力を有していた、最も重要な漢詩人の一人である。その詩集『黄葉夕陽村舎詩』は明治期にまで版を重ねたベストセラーであり、日本文学史を語る上で決して外せない作品だといえる。しかしそれにもかかわらず、茶山あるいは『黄葉夕陽村舎詩』に関する研究状況は寥々たるものがあるといわざるをえない。江戸期の代表的詩人である茶山の研究が立ち遅れているということは、江戸漢詩そのものの研究が不十分であることを端的に示していよう。

とくに、従来の研究では、茶山詩の特徴を、南宋風の穏やかな田園詩とみる向きが多かった。たしかに茶山の作風にそうした一面があることは否定できないが、80歳まで生きた茶山の詩風を単一の評言をもって規定するのははなはだ危険なところみではなからうか。

(2) そうした問題意識のもと、報告者は以前より広島県立歴史博物館の所蔵にかかる『黄葉夕陽村舎詩草稿』の調査を行ってきた。

この草稿には版本未収録の作品が数多く収められており、茶山の詩風究明や伝記研究に資する、極めて貴重な資料といえる。さらにこの草稿には、頼山陽や六如たちによる大量の書き入れが確認でき、版本の成立事情をうかがうための重要な資料だとかんがえられる。

報告者はこれまでにこの草稿の一部を用いて、茶山研究を行ってはきたものの、草稿は膨大な分量に及ぶため、また長らく菅家に所蔵されていたため、十分な調査はされてこなかった。しかしながら、茶山研究および茶山が交流をもった文人たちの研究を大幅に推進させるためには、この草稿を用いた調査・研究が喫緊の課題なのである。

## 2. 研究の目的

上述の研究背景を踏まえた上で、本研究の目的を以下の3点とした。

(1) 『黄葉夕陽村舎詩前編』草稿から版本にいたる過程において、削除された作品や、文字に異同が見える作品を整理・調査すること。

とくに、これまで明らかにされてこなかつ

た、茶山の詩風や思想を解明しうる作品を取り上げ、詳細に分析する。報告者は以前に詩集草稿の前編巻一を取り上げ、茶山詩に政治批判の詩が見えることを論じたことがあったが、前編巻一だけでなく、調査の範囲を拡大して、茶山詩の全貌を究明する必要があるとかんがえられる。

(2) 『黄葉夕陽村舎詩前編』草稿における書き入れを調査し、それらが版本成立にいかなる影響を与えたのかを分析すること。

茶山の先輩にあたる六如の書き入れは、とりわけ重要な意味をもつとかんがえられる。茶山は六如を尊敬してやまなかったため、六如の評語は、茶山の詩作に大きな影響力をもっていたと思料されるからである。出版に際して、茶山は六如の指摘をどのように活かし、どのように自身の作品を形作っていたのかといったことについて分析する。

そしてもっとも重視されるのが、詩集の編纂を担当した、頼山陽の書き入れである。このとき山陽は茶山の居宅に住まい、草稿に種々の書き入れを施し、編纂作業に従事した。そして疑義があると、その都度、茶山と相談していたのである。山陽の書き入れを分析することで、版本の成立事情や、作品の推敲過程がより鮮明に究明しうるとかんがえられる。

以上の検討は、上記(1)の目的と連関しており、部分的には問題意識を共有することになる。茶山の詩風が、諸氏の評語にどのような影響を及ぼしたのか、これを考察する必要がある。

(3) 版本未収録作品を読解することによって、茶山周辺の文人ネットワークを明らかにし、茶山およびその周辺の文人たちの伝記的事項を補綴すること。茶山は多くの文人と交流したので、版本では削除された作品から、いまだ知られていなかった文人たちの事績があきらかになるはずである。

## 3. 研究の方法

(1) 研究目的を達成する上で不可欠な基礎的調査として、まずは『黄葉夕陽村舎詩前編』の草稿および版本のデータ入力整理を行う。草稿の本文・書き入れをデータ化し、あわせて版本との異同を付記する。

(2) 続いて、版本・草稿間にどのような文字の異同があるかに着目しつつ、その推敲の様子を分析する。また、刊行に際して削除された作品を取り上げ、削除された理由を究明する。

(3) さらに、作品本文だけでなく、そこに書き入れられた諸氏の評語が、版本・草稿間において、どのように改変・削除されているかを調査する。

具体的には、茶山が尊敬し、京都詩壇を領導した詩僧六如と、詩集編纂を担当した頼山陽が大きな影響をもっていると考えられるので、この二名の書き入れを調査・分析し、版本成立にどのような影響を与えたかを考

察する。

(4) 右の研究と並行しながら、茶山を中心とした文人交流ネットワークを解明する。茶山は、全国各地の詩人、学者、画家、俳人、武士、僧侶らと交流しており、版本未収録の作品を読解することで、これまで知られていなかった交流の様子を浮き彫りにする。これによって、茶山の伝記研究を推進し、あわせて周辺の文人たちの伝記事項を補綴する。

#### 4. 研究成果

以上の研究によって、次のような成果を得た。

(1) 草稿調査の結果、天明期の茶山は、田沼意次や福山藩の圧政を批判する作品、あるいは天明の大飢饉にともなう百姓一揆の様子を詠じた作品、すなわち、社会風刺の詩作を数多くのこしていることがわかった。そして、そのほとんどすべてが出版に際して削除されていることが判明した。

とくに百姓一揆を詠じた詩作について述べる。福山藩全土を揺るがした天明期の百姓一揆は、天明六年歳末および天明七年初頭の二度にわたった。茶山は当初、貧農を憐れみながらも、一揆を未然に防ぐことの出来なかった自分自身の不甲斐なさを嘆くような作品を詠じていた。ところが、二度目の一揆に際しては、もっぱら藩政を批判する作品が詠じられ、茶山が当局に対して一方ならぬ怒りを示しているのである。

これは藩主阿部正倫が一揆勢の要求を一度は受け入れたものの、翌年にはその約束を反故にするという失策にもとづくものとかんがえられる。それまでは藩政も不十分ではあるものの、百姓らが一揆という暴力的手段に訴える非も鳴らしていた茶山であったが、藩の失策を機に、貧農をないがしろにする当局に怒りをあらわにし、一揆勢に同情する気持ち強くしたものと理解できる。

草稿によれば、こうした藩政への失望と怒りはその後、しばらくの間は続いていたようだが、一揆勢の勝利とそれに続く松平定信による幕政刷新を受け、社会批判の作品はいちじるしく減少していく。

そうしたなかで注目されるのは、このような政治批判の作品について、頼山陽が、当局の忌諱に触れかねないといった旨の書き入れをほどこしているということである。つまり、これは草稿において山陽は茶山に注意を喚起しているということであり、また茶山は山陽の忠告にしたがって、作品の取捨選択を行っていたということになるのである。

さらに、従来、茶山の詩風は「写実的で平明穏雅な田園詩」などといった認識が一般的であった。しかしながら、上述のように草稿にはそうした詩風とは一線を画す、厳しい諷諭の作が多い。草稿を調査することで、治国平天下、経世済民を志し、貧農のためには政治批判も辞さないという、茶山の士大夫としての一面を新たに浮かび上がらせることが

できた。そして、一揆が落着いたことを受けて、茶山の詩作がいわゆる穏やかな田園詩に傾いていったことを考え合わせると、この時期が茶山の詩風の転換期だったとかんがえられるのである。

なお、締め切りの都合で「5. 主な発表論文等」の項目には記載できなかったが、この成果はすでに論文としてまとめ、『明治大学教養論集』に投稿しており、近日中に成果の詳細を公表できることを申し述べておく。

(2) 草稿に施された書き入れ調査については、以前より重要な役割を演じていたと考えられる、六如と頼山陽のものに注目した。

山陽は事前に届けられた六如書き入れ本を手元に置きながら自らの評語を記し、編纂作業に従事した。草稿において六如はしばしば茶山の詩作を批判する評語や、文字の改変を迫る雌黄をほどこしているが、山陽はそうした六如の書き入れを時に強い口調で否定し、茶山を擁護する記述を行っている。

版本において、茶山を批判する六如の評語が削除されていたり、山陽が六如を強く非難する部分が消され茶山擁護の書き入れだけが反映されていたりする例が見られる。あるいは六如による茶山批判の評語に妥当性があっても、山陽は渋々これを認めるといった様子で、時には六如の意見を版本に採用しておきながら、評語そのものを削除している場合もある。さらには六如・山陽両者の見解を踏まえた上で、茶山がまた新たに詩句を改稿している例も見出せ、茶山の詩作にける執念や推敲の跡をたどることもできる。

草稿における六如・山陽両者の評語を分析することで、茶山は六如を尊敬しつつも、往々にして山陽の見解に従っていること、山陽は六如に対して対抗意識を抱いていることなどの知見を得られ、版本の成立事情の一端を明らかにすることができた。

なお、この成果は平成二十五年度早稲田大学国文学会秋季大会にて発表しており、近日中に論文にまとめて、学術雑誌に投稿する予定をしている。

(3) 茶山およびその周辺の文人の伝記研究については、これまでほとんど明らかにされてこなかった寛政七年の茶山の動向に焦点を当てた。この年には、茶山が前年の寛政六年になした近畿周遊の旅で新たに得た知友との詩の応酬や、尾道での中秋の観月などといった文学的営為を行っており、草稿を調査することで、茶山を中心とする文人交流ネットワークの一端をうかがうことができた。とくに、前編の遺稿集であるため、これまで年次不明であった、後編巻一・二に収められた諸作品の制作時期を数多く特定することができ、茶山の伝記研究を推進させたとかんがえられる。

なお、この成果は『江戸風雅』第9号にて「寛政七年の菅茶山」と題する論考として発表している。

5．主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小財陽平「寛政七年の菅茶山」(『江戸風雅』第9号、2014年6月、p100-120、査読なし)

〔学会発表〕(計1件)

小財陽平「六如の評語と『黄葉夕陽村舎詩』の成立事情」(早稲田大学国文学会、2013年11月30日、早稲田大学)

6．研究組織

(1)研究代表者

小財陽平 (KOZAI, YOUHEI)  
明治大学・法学部・専任講師  
研究者番号：633314